

4 調査結果のまとめ

(1) 尾張地域

9月の降水量が少なかったが、年間降水量は平年より多かった(資料-6)。揚水量はやや減少しており、地下水位はほぼ全域で上昇した。

1年間に1cm以上沈下した水準点はなく、沈下域は見られなかった。

地盤沈下と地下水位の関連について、累積最大沈下点「A3-4」近くの十四山地盤沈下観測所の地下水位と同観測所にある水準点「A309」の累積変動量を例として図-23に示す。地下水揚水量の減少による地下水位の上昇に伴い沈下速度は鈍化し、最近では微少な隆起沈下を繰り返しながら沈静化している。

なお、愛西市立田町福原の水準点「下流NL14」では最近5年間で3.37cm沈下しており、沈下しやすい軟弱な粘土層が厚く堆積している尾張西部においては、緩やかであるが、依然として沈下の傾向にある地点がみられた。

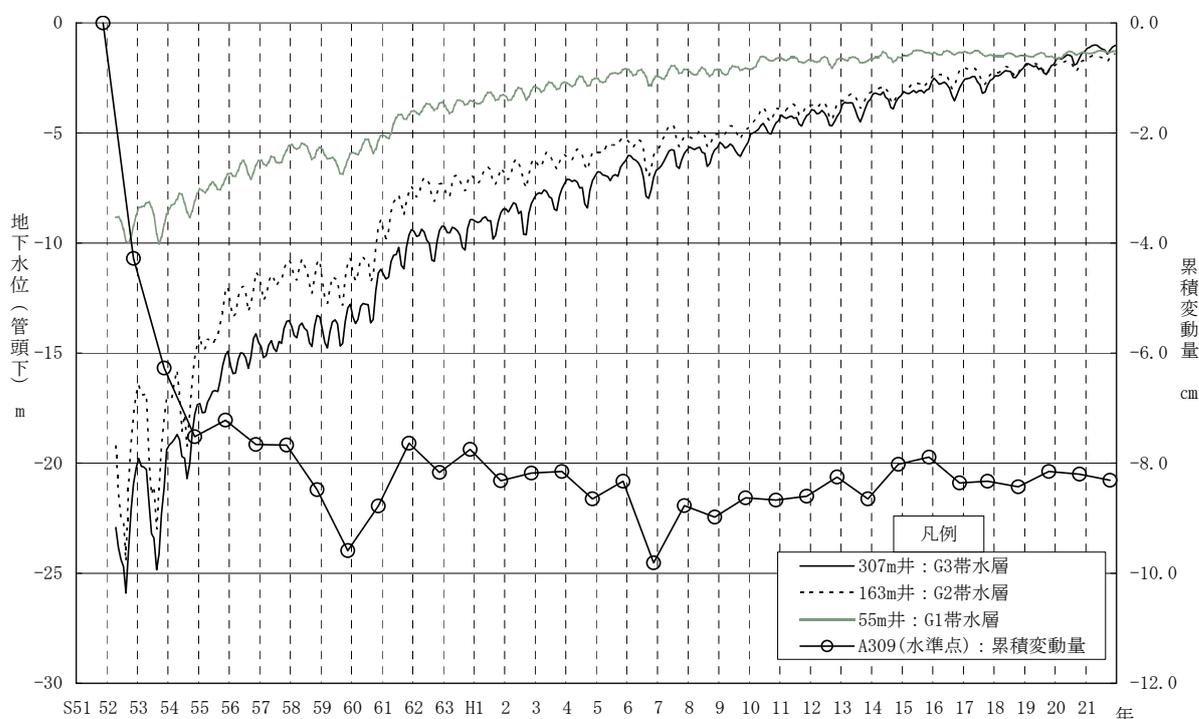


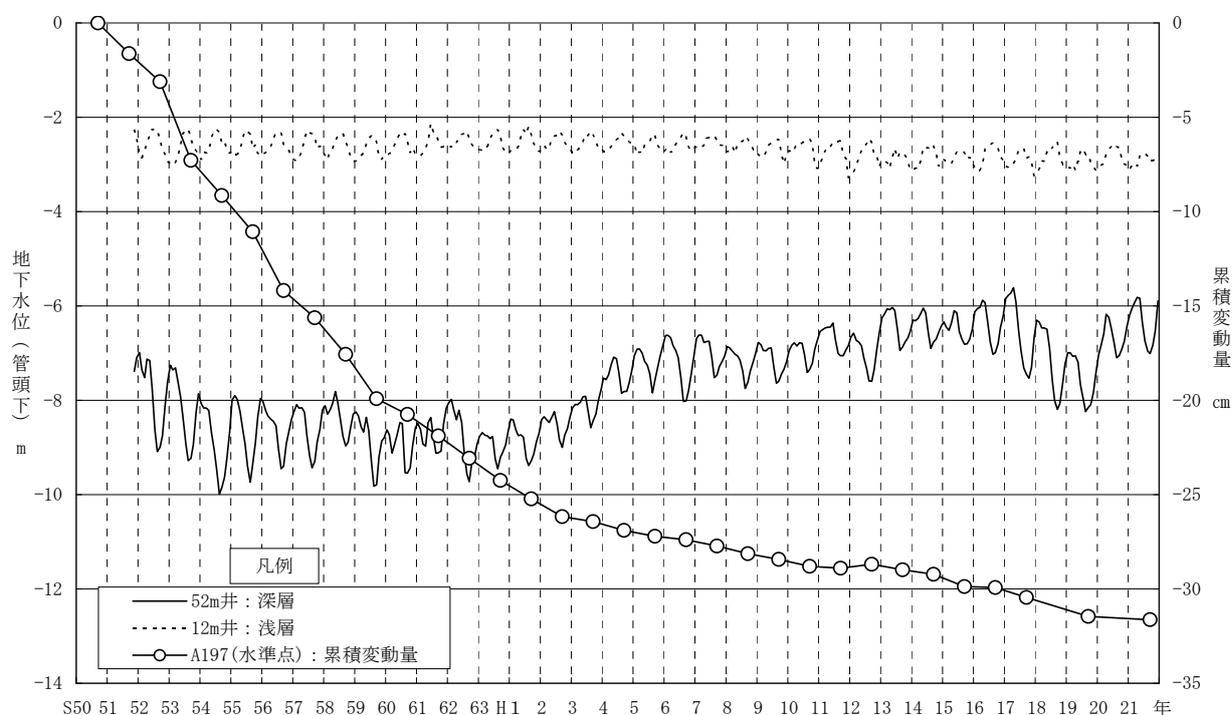
図-23 十四山地盤沈下観測所における地下水位及び水準点「A309」累積変動量

(2) 西三河地域

平年に比べて降水量が多く（資料－6）、地下水位はほぼ全域で上昇し、平成19年度からの2年間で、1年当たり1cm以上の沈下を示した水準点はなく、沈下域は見られなかった。

矢作古川流域においては、昭和50年代後半までは地盤沈下域が生じるなど大きな沈下が見られていたが、地下水揚水量の減少とともに昭和60年代以降は緩やかな沈下となっており、近年は1cm以上の沈下はなく、ほぼ沈静化の傾向を示している。

地盤沈下の経緯を見るため、矢作古川流域の吉良地盤沈下観測所の地下水位と同観測所にある水準点「A197」の累積変動量を図－24に示す。全体的には、昭和60年以降、地下水位の上昇とともに地盤沈下は鈍化・沈静化してきているが、ここ数年を見ると、地下水位は概ね横ばいの傾向であり、今後も地下水位と地盤の変動に注意する必要がある。



図－24 吉良地盤沈下観測所の地下水位及び水準点「A197」の累積変動量